

新人研修レポート

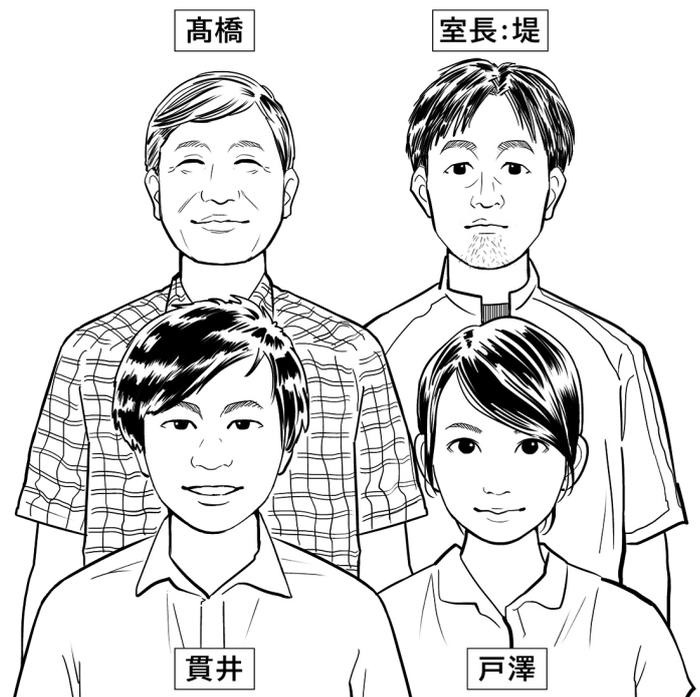
営業部 学術・安全管理室
戸澤 世利子・貫井 涼平

初めまして。今年4月に中途採用により入社しました戸澤世利子と申します。前職では家畜保健衛生所の職員をしていました。営業部の学術・安全管理室に配属となり、これからは安全管理(GVP)と学術情報の提供などを担当させていただきます。動物用医薬品業界は未経験のため、営業に同行する「同行研修」と、実際に農場で作業を体験する「農場研修」を受けましたので、その概要について拙筆ながらご報告させていただきます。

同行研修では、訪問した中で千葉県が最も印象に残りました。千葉県は養豚が非常にさかんで、農場が密集したいわゆる養豚団地も存在します。他県に比べて特徴的だと感じたのは、地域に出入りする養豚獣医師がとて多いことでした。全国には養豚獣医師がほとんどいない地域も少なからずあり、それに比べると千葉県は恵まれていると思いますが、実際には病気のコントロールに苦心している印象でした。農場や獣医師、ディーラーから伺ったお話を総合すると、ワクチネーションを含む疾病コントロールの方針が管理獣医師毎で異なり、農場間で様々な情報が錯綜し対策を独自に試行錯誤している農場もあるようでした。いずれも、必ずしも悪いことではありませんが、地域単位で疾病をコントロールすることを難しくしている印象を受けました。ただ、こうして感想を言うのは簡単ですが、現地では様々な事情があることも想像されます。千葉県に限らず農場が密集する地域に共通する課題かもしれません。病気のコントロールの難しさを感じました。

農場研修では、海外事業部1名と貫井と私の3名で埼玉県の農場にお世話になりました。分娩舎では哺乳豚への鉄剤投与、育成豚舎と肥育豚舎ではワクチン投与、繁殖豚舎では妊娠鑑定など、3日間という短い期間でしたが多くの作業を体験させていただきました。ワクチンはおおよそ300頭に接種しましたが、その作業が体力的にもっとも重労働でした。育成豚は動きがすばしこく、二人がかりでコンパネを使って囲い込んでも、何かの拍子に堰を切ったように包囲網を突破され、未接種豚と接種済み豚が混ざってしまうということが何度か繰り返されました。肥育豚では、数頭が突進してくるとコンパネごと人が吹き飛ばされるという過酷な状況でした。作業にもたついていたところに農場の方が来て、ワクチン接種のお手本を見せてくれましたが、豚が暴れ始める前に素早く接種していくのを見て、その技術に感心してしまいました。ワクチンメーカーの獣医として、ワクチン接種の手間を理解する機会を得られたことは貴重な経験だったと思います。最後になりますが、今回の研修では、多くの方々にお会いしとても貴重な経験ができました。お会いした皆様にこの場をお借りして感謝申し上げたいと思います。今後は一日も早く皆様のお役に立てるよう精進してまいりますので、よろしくお願いいたします。

営業部 学術・安全管理室のメンバー



初めまして。今年の3月に麻布大学を卒業し、4月から新卒採用された貫井涼平(ぬくいりょうへい)と申します。僭越ながら、新人研修の一環で行った「営業同行研修」「農場研修」に関して感想等を述べさせていただきたいと思います。

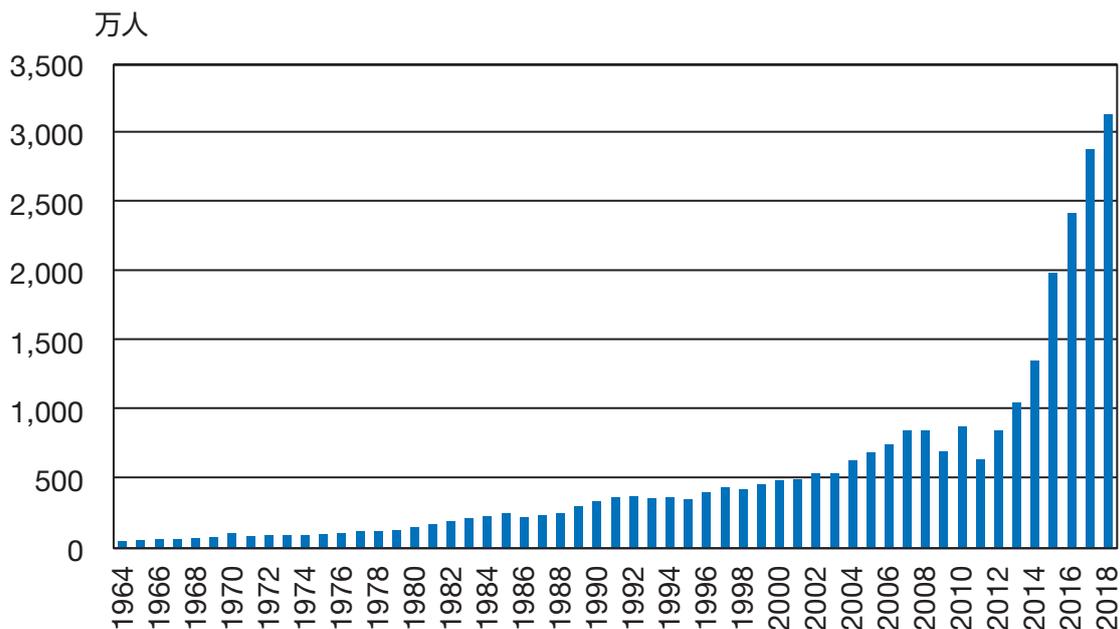
全国の営業担当者と同行していて気づいたこととしては、やはり豚コレラやアフリカ豚コレラに対する関心が高い方が多いと感じました。ほとんどの農場で、野生いのししなどの野生動物対策や車両の消毒など防疫対策に注力されていました。また千葉県では豚流行性下痢(PED)の発生が多くみられ、豚コレラ対策を中心に防疫対策をしている農場がありました。引き続き関係機関、自治体と協力して疾病対策に取り組んで欲しいと思っています。

来年以降、東京オリンピックや大阪万博が予定されています。訪日外国人数は20年前より約6倍になり、今後ますます増加していくことによって、輸入感染症の侵入リスクも増加することになるかと思えます(下図)。水際対策も重要になってきますが、加えて各農場の防疫対策もますます重要になってくると思いました。

ワクチンと疾病に関する話題としては萎縮性鼻炎(AR)、豚胸膜肺炎(App)、マイコプラズマ、豚繁殖・呼吸障害症候群(PRRS)などがありました。ワクチンに加え徹底した飼養管理によって、疾病を最小限に抑えている農場が多くみられました。養豚場での農場研修を経験して、逃げ回る3~5週齢の豚へのワクチン接種が重労働であることを実感しました。最高気温が35℃に達する中、ワクチン接種をするためには今後簡便な方法を考えていかなければならないと痛感しました。その他には哺乳豚への鉄剤投与や母豚へのワクチン接種など学生時代にはほとんど経験することができなかった貴重な体験をさせていただくことができました。

最後に「営業同行研修」「農場研修」に際し、対応していただいた方々にこの場でお礼を申し上げたいと思います。研修を通して、まだまだ私の知識が足りないことを実感したので、いち早く皆様のお力になれるように精進して参りたいと思います。

今後、日生研株式会社の学術担当として現場の方々にはお世話になると思いますが、何卒宜しくお願い致します。



出所：日本政府観光局（JNTO）発表統計より作成

年別訪日外国人数の推移（1964年以降）